

# 総括研究年度終了報告書

## 地域においてHIV陽性者と薬物使用者を支援する研究 (H27-エイズ-一般-001)

研究代表者：樽井 正義(特定非営利活動法人ふれいす東京 理事／慶應義塾大学 名誉教授)

研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ふれいす東京 代表)

大木 幸子(杏林大学保健学部看護学科 教授)

肥田 明日香(医療法人社団アバリ アバリクリニック 院長)

## 研究要旨

### 研究目的

薬物使用・不使用に関わる要因を探るために、出会い系アプリを利用した質問紙調査結果を分析し、MSMの性行動、HIV感染リスクと予防行動、薬物使用の現状等を明らかにすること、HIV診療機関で使用者の支援経験をもつ医療者への面接調査により、支援の方法と課題を示すこと、依存症クリニック受診者への面接調査結果の分析により、薬物使用から回復への過程における分岐点とそこに働く諸契機を検討すること、そして不使用と回復を助ける行政および民間の社会資源として、使用者と関係者が安心して利用できる相談窓口の情報を提供することを目的とした。これらの研究により、HIV陽性者と薬物使用者の支援、HIV感染と薬物使用の予防に資することが期待される。

### 研究方法

4つの分担研究により実施した。

- a. MSMの薬物使用・不使用に関わる要因の調査(生島)
- b. 地域の相談支援機関利用によるHIV陽性者・薬物使用者の回復事例の調査(大木)
- c. 薬物使用者の依存症クリニック受診経緯の調査(肥田)
- d. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査(樽井)
  - a. GPS機能付きの出会い系アプリを利用した薬物使用、性行動、HIV知識等に関する質問紙調査(LASH: Love Life and Sexual Health)では、全97問に回答した6,921人のデータを解析し、単純集計及び各種要因の関連性を考察した。
  - b. HIV診療機関において薬物使用者への支援経験をもつ4人の医療者に、半構造化面接を行い、その逐語録から、薬物使用判明前と判明後における支援方法、支援に際しての基本的態度、支援にあたっての課題を抽出した。
  - c. 依存症クリニック受診者7人への半構造化面接を実施、逐語録を作成し、薬物の初使用から依存が形成されてケアにつながるに至る経緯(分岐点と等至点)、各分岐点での方向付けの要因(社会的方向付けと社会的助勢)を記述した。
  - d. 薬物使用者や関係者が安心して利用できる相談窓口を紹介するために、使用者と陽性者の支援団体、精神保健福祉センター、使用者自助グループ、依存症治療医療機関について情報を収集し整理した。

## 研究結果

出会い系アプリ調査からは、回答者の HIV の知識は概して高く、半数以上が HIV 抗体検査受検経験をもつが、過去 6 か月間にコンドームなしのアナルセックスを経験した人が半数近くおり、コンドーム使用等の予防と検査受検を勧める啓発の継続・促進の必要性が示された。薬物使用に関しては、使用を目撃した経験、勧められた経験をもつ人が回答者の 3 分の 1 以上おり、4 人に 1 人が生涯薬物使用経験をもつこと、さらに薬物使用とリスクの高い性行動との間に関連があることが伺われた。初めての使用が 10 代、20 代であり、7 割はセックスの相手に勧められて使用していることから、検討すべき介入が示唆された。

薬物使用者への支援経験をもつ HIV 診療機関の医療者の調査からは、支援の方法として、薬物使用の判明前には薬物について話してよい場であることを伝えて相談されるのを徹底して待つこと、判明後には逮捕も支援のきっかけと捉え、回復意向を見きわめて支援方針を検討すること等が示された。支援の基本的態度として、薬物使用に健康問題として関わる立場を堅持し、回復する力を信じてスリップをも話せる関係を目指すことが挙げられた。HIV 診療機関は、薬物依存症の回復プログラムへのゲート機能を担えることが指摘された。

依存症クリニック受診者の調査では、薬物使用者に共通する経緯として、生きづらさとゲイの交流の場の居心地のよさ、そこでの薬物使用による生活や人間関係への支障と止めようと思えば止められるという根拠のない自信、通報を恐れ言い出せないこと、司法や医療による介入を経てクリニック受診と LGBT グループへの参加等が挙げられた。使用せずに生きるためグループ参加を継続し、やがて生きづらさに折り合いをつけるには、事実を振り返ることが必要であり、それには社会的助勢として、仲間が存在や家族・パートナーの理解と、ありのままの自分が受け容れられる相談窓口や支援環境が必要なことが指摘された。

薬物使用に関する相談窓口の調査では、薬物使用者とその関係者が通報される心配をもたずに安心して相談できる窓口として、首都圏の機関の情報が整理された。使用者に信頼される相談窓口は少数であり、充実の必要性が示唆された。

HIV 感染と薬物使用の予防を促すには、薬物使用は健康問題であることを踏まえて、支援を必要とする MSM に届く啓発をさらに検討する必要性が示された。

## A 研究目的

本研究に先行する「地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」（平成 24 ～ 26 年度）によって、私たちの社会では男性とセックスする男性 (MSM) 間の HIV 性感染に薬物使用が関連していることが明らかにされ、さらに薬物使用に関しては、使用する・しないという単純な排他的二分があるのではなく、使用を勧誘され断る・受け容れる、使用を止める・続ける、回復への方策が見つかる・見つからない等、時間軸に沿った幾つかの分岐点があることが示唆された。

これを受けて本研究では、薬物使用・不使用に関わる要因を探るために、MSM の間での性行動、HIV 感染のリスクと予防行動、薬物使用の現状を出会い系アプリを利用した質問紙調査結果の分析によって明らかにすること、HIV 診療機関で使用者の

支援経験をもつ医療者への面接調査により、支援の方法と課題を示すこと、依存症クリニック受診者への面接調査結果の分析により、薬物使用から回復への過程における分岐点とそこに働く諸契機を検討すること、そして不使用と回復を助ける公的および民間の社会資源として、使用者と関係者が安心して利用できる相談窓口の情報を提供することを目的とした。これらの研究により、HIV 陽性者と薬物使用者の支援、HIV 感染と薬物使用の予防に資することが期待される。

## B 研究方法

本研究は、4 つの分担研究によって構成される。

- MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査 (生島)
- 地域の相談支援機関利用による HIV 陽性者・薬

物使用者の回復事例の調査(大木)

c. 薬物使用者の依存症クリニック受診経緯の調査(肥田)

d. 薬物依存からの回復を支援する社会資源の調査(樽井)

a. MSMの薬物使用等に関する量的調査では、1年目に14人の面接調査を踏まえて性的指向と性行動、HIVの知識・感染予防・検査、薬物使用、メンタルヘルス上の問題等18項目、下位項目97の質問紙を作成し、2年目に自己回答式インターネット調査(LASH: Love Life and Sexual Health)を、新設したウェブサイト(LASH online, <http://lash.online/>)とN社のGPS機能付き出会い系アプリで募集した対象者について行った。回答に着手した10,544人についてデータクリーニングを行い、本年度は、基礎情報無記入、重複回答、矛盾回答等を除き、全問に回答した6,921人を対象としてデータ解析を行い、単純集計及び各種要因の関連性について考察した。

b. MSMであるHIV陽性者の薬物使用からの回復事例の調査では、1、2年目に行った薬物依存から回復した陽性者の調査に加えて、本年度はエイズ治療拠点病院および診療所に10年以上勤務して薬物使用者を支援した経験をもつ医療者(医師2人、看護師1人、社会福祉士1人)に半構造化面接を行い、その逐語録を分析して重要と思われる事項を抽出し、薬物使用が疑われるが判明する前の段階と、判明した後の段階において支援を提供する方法と課題、支援に際しての医療者の基本的態度、HIV診療機関等における陽性者、使用者への支援提供に関わる課題の4点について整理した。

c. 依存症クリニック受診者調査では、1年目に診療録を用いた後方視的量的調査をMSMの受診者65人について行い、受診者のプロフィール(薬物使用と受診、感染症罹患等)を明らかにした。これを踏まえてインタビューガイドを作成し、2、3年目に、クリニックのグループプログラム(LGBTグループ)に参加経験のある7人に個別の半構造化面接を実施した。その逐語録について、複線径路等至性

アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)を参考に質的に分析を行い、薬物の初使用から依存が形成されてケアにつながるに至る経緯(分岐点と等至点)、各分岐点での方向付けの要因(社会的方向付けと社会的助勢)を検討した。

d. 使用者支援のための社会資源調査では、1年目に医療者および公務員に課されるいわゆる通報義務と診療義務、守秘義務の関係について、法律と先行研究におけるその解釈、行政における判断の事例を検討し、2年目には日本における薬物使用とその対策の現状を概観するために、使用の実態、刑事対応の推移、政策動向等に関する情報を収集した。本年度は、薬物使用者や関係者が安心して利用できる相談窓口を紹介するために、陽性者および使用者を支援するNGO、薬物使用に対応する行政機関である精神保健福祉センター、依存症治療を提供する医療機関について、インターネット等を通じて得られた情報と、研究機関であるふれいす東京と連携のある組織から得られた情報を整理した。

## 研究結果

a. MSMを対象者とする出会い系アプリ調査からは、HIVに関しては、これを身近に感じていると回答した人は55.5%、HIV抗体検査を受けた経験のある人は62.3%と高い割合であった。HIVの感染経路や予防方法に関する知識レベルは概して高かったが、治療により感染性が低減されるという知識をもつ人は4割前後だった。その一方で過去6か月間にコンドームなしのアナルセックスを経験したと回答した人の割合は48.6%だった。回答者の1.2%はトランスジェンダーであり、このグループについても初めて少数ながら量的調査が行えたが、HIVの身近感や検査受検率は全体よりも低いという結果が示された。薬物使用については、使用しているのを見たことがあると回答した人は41.4%、薬物使用を勧められた経験がある人は36.1%で、MSMを取り巻く環境に薬物使用が存在することが明らかになった。薬物を使用しない理由として、危険だからを97.4%、違法だからを97.0%、使用する理由としては、セックスの快感や痛み軽減を

79.6%、現実逃避や不安軽減を 69.7% の回答者が挙げた。生涯で薬物使用経験のある人は 25.4%、過去 6 か月間に限ると 11.3% であった。生涯薬物使用経験者の開始年齢は、8 割が 10 ~ 20 歳代で、性的なパートナーに誘われて始めた人が 71.9% だった。過去 6 か月間に使用した人は使用しない人よりも、コンドームを使わないアナルセックスの経験、複数のセックスパートナーの割合が有意に高かった。また、全体の 7 割弱が子どもの頃に逆境体験(虐待、いじめ等)を持ち、その複数の体験と薬物使用との間に関連が認められた。これらの調査結果を紹介するパンフレットを作成し、全国 6 都市で報告会を行った。これを踏まえて、HIV 感染と薬物使用の予防を促すために、また回答者等に研究成果を還元するために、啓発パンフレット「意外と知らない僕らのリアルなセックスライフ—LASH 調査報告書—」を制作した。

b. 陽性者の薬物使用からの回復事例に関わった医療者の調査からは、薬物使用が明らかになる前の支援方法として、薬物使用のサインを把握し、薬物について話してよい場であることを伝え、相談されるのを徹底して待つことが、薬物使用が明らかになった後には、逮捕も薬物依存症への支援のきっかけとして捉え、HIV 診療機関来院を肯定的に評価し、回復意向を見きわめて支援方針を検討し、心理的問題や生活問題への支援リソースを紹介すること、再使用により逮捕された場合も心配しているというメッセージを伝えることが示された。使用者への支援の基本的態度としては、医療者として健康問題に関わる立場を堅持し、回復の力があることを信じ、スリップについても話せる関係づくりを目指すことが示された。また、支援にあたっての課題として、HIV 診療専門職の力量の向上、セクシュアリティや HIV について理解をもつ薬物依存診療機関や支援機関の増加、薬物依存症が健康問題であることの啓発の強化が挙げられた。

c. 依存症クリニック受診者の調査では、薬物使用過程に共通する分岐点とそこに働く要因が示された。使用前には生きづらさとゲイ同士の交流の場の居心地のよさを経験し、そこで薬物を初めて使用し、

その後自ら入手ルートを得て継続的に使用するようになった。やがて生活や人間関係に支障が出て薬物使用に「ハマってる」「まずい」という思いと、「止めようと思えば止められる」という根拠のない自信とを持つようになるが、通報される怖さ等から人には相談できないままに、止めるという選択肢はもたずにいた。司法や医療からの社会的第三者の介入ののちクリニックを受診して LGBT グループに参加し、そこで薬物使用という事実を直視して使用せずに生きることを決意し、LGBT グループへの参加を継続した。そして自身の生きづらさの背景を考え直して生きづらさに折り合いをつけ、自分の社会生活を送る方向に踏み出していた。この等至点への歩みには事実を振り返る必要があり、それを後押しする社会的助勢として、仲間の存在や家族・パートナーの理解、ありのままの自分が受け容れられ安心して過ごせる環境が指摘された。

d. 薬物使用に関する相談窓口の調査では、首都圏の 4 都県と関西の 3 府県について、薬物使用者とその関係者が通報される心配をもたずに安心して相談できる窓口について情報を集めた。これに基づき、十分な情報が得られた首都圏の相談窓口には今回は限定し、26 の機関を紹介するパンフレットを作成した。パンフレットに掲載した公的ではない機関からは掲載の了解を取得し、また HIV と薬物使用に関する情報を提供している 2 つのウェブサイトの情報も掲載した。「HIV マップ」と「Futures Japan」の情報とともに、公的資金による HIV 対策研究の成果を基にしている。

## **D** 考察

### 1. 本研究の限界と介入研究の課題

出会い系アプリ調査の分析対象者は 6,921 人で、これまでになく規模の大きな研究が行えたが、1 つの出会い系アプリを利用したものであり、回答者は大都市と周辺部が圧倒的に多く、日本の MSM を代表しているとは言えない。また回答者のセクシュアリティは 95.8% がゲイ・バイセクシュアル男性で、性的指向は男性だけが約 8 割と多数ではあったが、約 2 割は男女を対象にしており、回答者に

はトランスジェンダーも含まれていた。今後の HIV 予防啓発では、性的少数者のこうした多様性を十分に踏まえることが重要と考えられる。

またこの調査は横断研究であるため、薬物を使用したから HIV 感染リスクの高い性行動をとっているのか、或いはもともと HIV 感染リスクの高い性行動をする集団は薬物を使用する傾向が高いのかを示すことはできない。ただし少なくとも、出会い系アプリを利用する MSM において、薬物使用と HIV 感染リスクの高い性行動に強い関連性がある可能性は示唆された。HIV 感染と薬物使用とを防止する今後の啓発活動には、多くの MSM が利用するアプリと連携して情報を提供することが有効と考えられる。その際に、薬物を使用する MSM のニーズを量的・質的双方の視点で適切にくみ取っていく必要があると思われる。

## 2. 薬物を使用する陽性者への支援

依存症から回復した陽性者および依存症クリニック受診者への面接調査からは、薬物使用者は使用と不使用の分岐点において、使いたい・止めたいという葛藤をもちながら、通報や非難を恐れて人に相談できずにいることが示された。しかし、安心して相談できる窓口は極めて限られており、広く知られてはいない。相談窓口の充実がはかられ、その情報が必要とする人に届けられて、薬物使用者やその関係者が容易に安心して支援を受けられる環境が整備されることが望まれる。

HIV 診療にあたる医療者や陽性者の支援者は、薬物使用を察知した場合にその対応に苦慮していることが、先行研究によって指摘されている。陽性者支援の場では、薬物使用者を援助する相談窓口等の業務に関する情報が不足している。HIV に関わる医療者や支援者は、陽性者、性的少数者にとって、それをもはや秘密にする必要のない人であり、そのかぎりで安心して相談できる立場にあり、薬物問題に対処する専門家ではなくとも、信頼できる情報を提供することはできる。地域の薬物問題に関わるダルク等の NGO や精神保健福祉センターが薬物使用者に提供している相談や支援の情報をもつこと、そうした機関と連携して陽性者を支援することが期待される。

## E 結論

出会い系アプリ調査からは、回答者の HIV の知識は概して高く、過半が HIV を身近に感じ、また HIV 抗体検査を受けた経験をもっているが、過去 6 か月間にコンドームなしのアナルセックスを経験した人が半数近くいた。知識・意識と行動の乖離が認められるとともに、コンドーム使用等の予防と検査受検を勧める啓発の継続・促進の必要性が指摘された。薬物使用に関しては、使用を目撃した経験、勧められた経験をもつ人が回答者の 3 分の 1 以上おり、薬物が MSM の出会いの場に存在すること、4 人に 1 人が生涯薬物使用経験をもつこと、さらに薬物使用とリスクの高い性行動との間に関連があることが示された。初めての使用が 10 代、20 代であり、契機はセックスの相手に勧められてが 7 割であることから、若い MSM に対して、使用を避けるコミュニケーションスキルの向上を促す介入の必要性が指摘された。これらの課題に向けて、HIV 感染と薬物使用の予防を促す啓発パンフレットを制作した。

薬物使用者への支援経験をもつ HIV 診療機関の医療者の調査からは、支援の方法として、薬物使用の判明前には、薬物使用のサインを捉え、薬物について話してよい場であることを伝えて相談されるのを徹底して待つこと、判明後は、逮捕も支援のきっかけとし、回復意向を見きわめて支援方針を検討し、心理面や生活面での支援リソースを紹介することが示された。また支援の基本的態度として、薬物使用に健康問題として関わる立場を堅持し、回復する力があることを信じ、スリップしてもそれを話せる関係づくりを目指すことが挙げられた。HIV 診療機関は、薬物依存症の回復プログラムへのゲート機能を担えることが指摘された。

依存症クリニック受診者の調査では、薬物使用者に共通する通過点、分岐点として、生きづらさとゲイ同士の交流の場の居心地のよさ、そこでの薬物使用による生活や人間関係への支障と止めようと思えば止められるという根拠のない自信、通報への恐怖から人に相談できないままに司法や医療による介入、クリニック受診と LGBT グループへの参加が挙げられ、支援的介入が求められる点であることが

認められた。使用せずに生きるために LGBT グループへの参加を継続し、やがて生きづらさに折り合いをつけようとするに至るには事実を振り返ることが必要であり、それを後押しする社会的助勢として、仲間の存在や家族・パートナーの理解と、ありのままの自分が受け容れられ安心を得られる相談窓口や支援環境が必要なことが指摘された。

薬物使用に関する相談窓口の調査では、薬物使用者とその関係者が、通報される心配をもたずに安心して相談できる窓口として、今回は十分な情報が得られた首都圏の相談窓口に限定して 26 の機関を選び、紹介するパンフレットを作成した。公的機関である精神保健福祉センターは電話相談と面談を提供しているが、薬物問題専用の電話相談を行っているのは 3 か所だった。私的機関としてはいくつかのダルクと、使用者・陽性者を支援する NGO それぞれ 1 つ、医療機関は性的少数者への対応の実績をもつ 2 つを掲載するにとどめた。薬物使用は健康問題であることを踏まえ、使用者が安心して気軽に相談できる窓口の充実と活用をはかることが、薬物使用と HIV 感染の予防には必要であることが示唆された。

## **F** 健康危険情報

なし

## **G** 研究発表

### 1. 論文発表

- 1) 樽井正義 . 保健問題としての薬物使用 . 松本俊彦他編 , ハームリダクションとは何か . 中外医学社 . 18-26, 2017.
- 2) 樽井正義 . 薬物使用者と医師一診療する義務と通報する義務一 . 精神科治療学 . 32(11):1459-1463, 2017.
- 3) 生島嗣 . パートナー・家族への支援 . 小西加保留編 , HIV/AIDS ソーシャルワーク 実践と理論への展望 . 中央法規出版 . 162-175, 2017.
- 4) 生島嗣 . 就労支援 . 小西加保留編 , HIV/AIDS ソーシャルワーク 実践と理論への展望 . 中央法規出版 . 175-189, 2017.

5) 生島嗣 . HIV と性の健康 . 関西性教育研修セミナー 10 周年記念誌 性について、語る、学ぶ、考える . 44-47, 2017.

6) Hayashi, K., Wakabayashi, C., Ikushima, Y., and Tarui, M. High prevalence of quasi-legal psychoactive substance use among male patients in HIV care in Japan: a cross-sectional study. Substance Abuse Treatment, Prevention, and Policy. 12(1):11, 2017.

### 2. 学会発表

- 1) 大槻知子、生島嗣、三輪岳史、池上千寿子、樽井正義 . ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダー等の性の健康に関する調査 . GID (性同一性障害)学会、2018 年、東京 .
- 2) 生島嗣、三輪岳史、山口正純、大槻知子、藤田彩子、及川千夏、若林チヒロ、大島岳、井上洋士、仲倉高広、樽井正義 . GPS 機能付き出会い系アプリを利用する MSM を対象にした、薬物使用、性行動、意識に関する LASH(Love life And Sexual Health) 調査概要 . 日本エイズ学会、2017 年、東京 .
- 3) 井上洋士、生島嗣、三輪岳史、及川千夏、樽井正義 . GPS 機能付き出会い系アプリを利用する MSM における Sexual Compulsivity スケール日本語 Ver. 1 の信頼性、妥当性の検討 . 日本エイズ学会、2017 年、東京 .
- 4) 大槻知子、生島嗣、三輪岳史、及川千夏、樽井正義 . ゲイ向け GPS アプリを利用するトランスジェンダー等の調査 . 日本エイズ学会、2017 年、東京 .
- 5) 仲倉高広、生島嗣、井上洋士、及川千夏、大島岳、大槻知子、野坂祐子、林神奈、藤田彩子、三輪岳史、山口正純、若林チヒロ、樽井正義 . LASH(Love life And Sexual Health) 調査における自己評価関連項目とコンドーム使用状況との関連について . 日本エイズ学会、2017 年、東京 .
- 6) 野坂祐子、生島嗣、三輪岳史、樽井正義、山口正純、大槻知子、藤田彩子、及川千夏、大島岳 . MSM の薬物使用及び HIV 感染と児童期の逆境体験との関連 . 日本エイズ学会、2017 年、東京 .
- 7) 三輪岳史、山口正純、及川千夏、大槻知子、藤田彩子、若林チヒロ、生島嗣、樽井正義 . 薬物使用と性行動と精神的健康度の関連性— MSM 向け出

会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査から  
ー. 日本エイズ学会、2017年、東京.

8) 山口正純、三輪岳史、及川千夏、藤田彩子、大槻知子、生島嗣、樽井正義. わが国のMSMにおけるPrEPおよびnPEPの認知度、利用経験、利用意向に関する分析—ゲイ向けGPSアプリ利用者の意識や行動に関するLASH調査から— . 日本エイズ学会、2017年、東京.

9) 大木幸子、生島嗣、樽井正義, 地域の相談支援機関利用による薬物使用HIV陽性者の回復事例の調査. 日本エイズ学会、2017年、東京.

10) Yamaguchi, M., Miwa, T., Ohtsuki, T., Ikushima, Y., and Tarui, M. Awareness, utilization and willingness to use PrEP among Japanese MSM using geosocial-networking application. The 9th IAS Conference on HIV Science, July 23-26, 2017, Paris, France.

## 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし